

七条剛

ILLUST. TwinBox

恋人

なま
れま
せんか？
には

ふんい

ですが

特別試読版

ちよろいん【ちよろ・いん】

あつという間に主人公のことを好きになる女の子のこと。

人の良いところを見つける天才で、どれだけ常識外れな主人公であろうとも、短所つむに目を瞑り、長所を最大限まで拡大解釈できるとも、稀有けうな才能の持ち主。

ドーパミンやエンドルフィンなどの、いわゆる脳内麻薬が生成されやすい体質である可能性が指摘されており、

医学分野では神経治療への応用ができるのではないかと、ごくごく一部の研究機関で期待されている。

ちよろい、と、ヒロインを掛け合わせた造語である、という説が有力であるが、正確なところは不明である。

——そんな奴やつ、いるはずがないと思っていた。

空想の世界にだけ登場する、主人公だけに限定された、都合のいい存在。

本来、人が人を好きになるという感情は、もつと複雑で、怪奇で、解析不能なもののはずだ。

確かに、一ひとめ目惚ぼれということもあるだろう。

しかしそれは、往々にして相手の外見に惹ひかれていただけなのだ。

メラビアンの法則が示すように、人の印象は視覚情報に大きく左右されてしまう。

だから、自分のようなイケメンでもない凡人には、なんの関係もない存在のはずだった。

そう、はずだったのに――

「――私、征斗先輩まさとのこと、好きになっちゃったんですっ！」

この日、征斗の前に現れたのは、三人のちよろいんたちだった。

真まっ赤かになりながら、必死に訴えてきたのは、同じ学校の制服を着た女の子だ。

前の日、あることがきっかけで知り合った、まだ五分しか顔を合わせていない少女。

その子が、癖くせのない綺麗きれいな髪を揺らしつつ、上目遣うわめづかいでこんなことを言ってきた。

「もう、この気持ちを胸に抑えておくことができないく

らい、本当に、好きで好きで、大好きなんです。ですから、征斗先輩。その、私とお付き合い、してくれませんか……？」

もじもじしながら、そんなことを唐突に言われ、完全に思考をフリーズさせられていると、

「——待ってほしい」

そこに、別の声が差し挟まれる。

振り返った先にいたのは、背の低い、どこか眠そうなまなざし眼差しを持った少女だった。

まだ小学生と言ってもいいくらいの背丈だが、一応、同じ学校の制服を着ているから、高校生なのだろう。

この子も、昨日会ったばかりで、一緒にいた時間は十

分あるかどうかだ。

そして、その女の子が懸命に背伸びをしながら、こちらの顔を見上げると、

「征斗のことを好きなのは、わたしも同じ。征斗、わたしと付き合おうといい。たくさん、気持ちいいこととしてあげよ？」

淡々と、しかし、大胆な宣言をされる。

なんと返していいのかもわからないでいると、三度、別の声が割り込んできた。

「——ま、待ちなさいよっ」

三人目は、姿勢がよく、ふわふわと柔らかく長い髪を背中に流している女の子だった。

まともに話すようになってから、一緒にいたのは五分くらいだろうか。

その女の子が、精いっぱいの勇気を振り絞るようにして、胸の前で両手を握り締め、告げてくる。

「あんたのこと、ずっと嫌いだった。私とあんたは、カマキリとアザラシが恋に落ちるくらい、あり得ない組み合わせだったって思った。でも、そうじゃないってわかった途端、自分でも驚くくらい、あふ気持ち溢れて止まらないの。これを止められるのは、あんたしかないんだ。だから、その、私が付き合っても、いいんだからね……？」

潤んだ瞳で見上げられ、思わず心臓が跳ねるのが自分

でもわかる。

突如として三人の女の子に囲まれ、返す言葉も次の行動も見つからず、酸欠の金魚のように、口をぱくぱくさせるしかない。

なにが起こっているのか。
どうしてこうなったのか。

それを理解するために、征斗は、昨日の夜に起こったばかりの出来事を思い出していた。

第一章 そのちよろいんたちがちよろ過ぎで

ブレンド一杯で二時間粘っていた客が、閉店間際まぎわになつて、ようやく出ていった。

「ありがとうございましたー」
レジでお釣りを渡した征斗まさとは、カウベルの音を聞きながら、改めて店内を見回す。

古びた大時計がちくたくと時を刻み、アンティーク調そろで揃えられた調度品たちが、静けさの中に落ち着いた空間を作り上げていた。

カウンターのの上にはサイフォンが置かれ、静かにコーヒーの香りを漂わせている。

そして、それほど広くないその店内には、もう誰も客が残っていないかった。

いるのは、丁寧に客の残したグラスを片付けている少女と、退屈そうにカウンターの奥でノートPCを弄いじっていた女性だけだ。

店長であるその女性——千鳥皐月ちどりさつきは、ちらりと柱時計を見上げてから立ち上がった。

「さて、そろそろ店閉めようか。二人とも、上がっていいよ」

「はい」

「わかりました、皐月さん」

皐月の号令とともに、征斗たちアルバイトはクローズの準備を始めた。

ここ、喫茶店『恋ノ下』には、二人のアルバイトがいる。

そのうちの一人、美月亜里沙は、トレイにグラスを載せてから、レジを閉める征斗に笑いかけてきた。

「お疲れさま、久世くん。今日もお客さん少なかったね」

「ん、そうだな」

売り上げを集計しながら、素直に頷く。

学校が終わってからシフトに入ったが、来店した客は

たつたの八人。

店の名誉のために言うと、別にコーヒーが不味まずいとか、セットのケーキが美味おいしくないとか、そういうわけではない。

単純に、立地が悪過ぎるのだ。

閑静な住宅街の路地奥にある喫茶店なんて、地元民だつてほとんど存在を知らないだろう。

「いつかこのお店、潰つぶれちゃうんじゃないかって、ちょっと心配してるんだ。せつかくお仕事慣れてきたのに」「鎖骨辺りまで伸ばしている髪を揺らしながら、亜里沙が店の長である皐月を振り返る。

「皐月さん、大丈夫なんですか？」

「んー？ どうだろうね」

実に興味なさそうな声で、皐月は相変わらずノートPCを弄っていた。

本当に興味などないのだろう。

実際、店の売り上げについてどうこう言っているところろは、一度も見たことがない。

「オーナーに聞いてみるといいんじゃないかい？ 私は、雇われ店長だからね」

言つて、皐月はサイフォンの中に余っていたコーヒーをカップに移した。

皐月は背が高く、一つ一つの所作しよわざが、なんでも絵になる人だ。

モデルとして、雑誌の表紙を飾っても違和感はないだろう。達観した物言いをするが、年齢も征斗たちと大して違いはない。

「噂うわさのオーナーさん、わたし、会ったことないんです。やっぱり、お金持ちの方なんですよね？」

「そうとは限らないけれどね。なあ、征斗」

「どうでしょうね」

適当にはぐらかそうとした征斗に、亜里沙は興味津々といった様子で尋ねてきた。

「そっか、久世くんは、オーナーさんと会ったことあるんだよね？」

「会ったことがあるというか、なんというか」

言い淀んだ征斗を助けるように、皐月が声を挟んでくる。

「亜里沙、そろそろ帰らないと、門限があるんじゃないのかい？」

「あ、いけない！」

古時計が刻んでいる時間を見て、亜里沙は慌ててカウンターを片付け始めた。

「残りはやっておくから、先に帰っていいぞ」

「え、でも……」

「いいから」

亜里沙の両肩を搦んで、くるりと反転させる。

喫茶店の制服のスカートが、動きに合わせて、ふわりと

弧を描いて舞った。

そして、その背中をバックヤードに向けて押してやる
と、亜里沙は申し訳なさそうな顔で振り返ってきた。

「いつもごめんね、久世くん。この恩は、絶対に返すか
らね」

「気にしなくていいから、早く帰れ」
追い払うように手を振る。

ありがとう、と言って奥へと引っ込もうとした亜里沙
に、征斗は思わず声を投げかけた。

「あ、美月！」

「？」

小首を傾^{かし}げて、亜里沙が問いかけてくる。

「どうしたの、久世くん？ あ、やっぱり手伝おうか？」

「いや、そうじゃなくて……」

エプロンのポケットに手を突っ込み、言葉を探すように視線を泳がせた。

しかし、虚空こくうにはなんの手助けもないことを思い知らされ、征斗は内心でこっそり嘆息たんそくしてから、こっそり絞り出した。

「……暗いから、気をつけて帰れよ」

「うん、ありがとう。また明日、学校でね」

バイバイ、と小さく手を振って、亜里沙が出ていく。

それを黙って見守っていた皐月が、耐えられなくなつたように嘖き出した。

「くくっ……」

「……なんですか、皐月さん」

「いやいや」

面白^{おもしろ}いコメディでも見たような反応で、目尻に浮かんだ涙を拭^{ぬぐ}いながら、皐月は綺麗^{きれい}な指先を店の外に差し向けてみせた。

「送ってあげればいいじゃないか。クローズは私がやっておくよ。ついでに、伝えたいこともあるんじゃないかい？」

「……なんのことでしょう」

とぼけてみせるも、皐月はカウンターに肘をつき、小さく笑った。

「なにもなければいいさ。けど、亜里沙は鼻^ひ目^いを^きめ抜^めきにしても可愛^{かわ}い子^いだ。誰かに取られてしまっ^かてからじゃ、手遅れだよ？」

「ですから、別にそういうのじゃ」

こちらの反論など聞くつもりはないようで、皐月はコ―ヒーを傾けながら、見透かすような眼^ま差^なしを向けてくる。

「キミのことだから、我々の活^く動^{どう}に、亜里沙を巻き込みたくないとか思っているんだろう？」

「……………」

凶星で言葉を返せないでいると、皐月がふつと優しい笑みを浮かべてくる。

「キミのそういう真面目なところ、私は好きだよ。ま、少し真面目過ぎるんじゃないかとは思っけねどね」

怖いくらい鋭い皐月の話をよそに、征斗はエプロンを外し、ぐるぐると丸めて脇わきに抱えた。

そして、これ以上突っ込まれないよう、意図的に話のベクトルを捻ねじ曲げる。

「……それより、例の件は順調ですか？」

「ああ」

愛機であるシルバーのノートPCを弄りながら、皐月は軽く頷いてきた。

「事前の情報収集はあらかた終わったよ。ただ少し、シルバーが堅牢けんろうそうだね」

「手間取りそうですか？」

「かもしれないね。もしかしたら、キミの手を借りることになるかもしれない。どちらにせよ、明日の昼には準備が整うから、その頃ころに一度連絡するよ」

「わかりました」

征斗は改めてレジが閉まっていることを確認してから、カウンター裏に置いてあった自分の鞆かばんを引ひつ搦つかんだ。

「上がります」

「車で送ろうか？」

「いえ、コンビニで飯買ってくんで」

「ちゃんと自炊した方がいいぞ？ ああ、失敬、作ってくれる彼女を募集中だったね」

「……お疲れさまでした」

バックヤードを抜け、裏口から外に出る。

見上げた空には、コンパスで描いたかのような、まん丸い月が浮かんでいた。

「帰るか」

夜風に目を細めながら、ゆっくりとした歩調で歩く。近所のコンビニに寄り、そこで適当に弁当を買って、家のアパートで食べて寝る、というのが征斗のいつものパターンだ。

今日はなにで空腹を満たそうかと考えていたところで、「——し、しつこいですっ——！」

そんな鋭い女性の声が、耳に飛び込んでくる。

反射的に目を向けると、コンビ二の駐車場の隅、電柱の影になる位置で、一組の男女が言い争っていた。電柱を背に立っている、征斗と同じ歳としくらいの少女が、目の前の男に再び叫ぶ。

「し、知らないって、言ってるじゃないですかっ」

「知らないわけないじゃんか。ねえ？」

少女へ覆おおいかぶさるような形で、髪を脱色した若い男が、ねっとりとした笑みを浮かべている。

「じゃあ、口を割るまで、遊んであげようか？ 朝になつてる頃には、すっかり立てなくなってるかもしれないけどね」

「や、やめてくださいー！」

「カカ、いいね、そういうの。そそっちゃうね」

経緯はわからないが、その短いセンテンスだけで、大
体の状況は理解できた。

つまるところ、悪がいるのだ。そして同時に、助けを
求めている人がいる。

「誰か……！」

「残念、こういう時、意外にみんな助けしてくれないんだ
よ。だってほら、俺おれら遊びに行くだけだし」

男の言う通り、通り過ぎる人たちは、スマートフォン
を眺めながら、足早に去ってしまふ。

そのことに絶望したような表情を浮かべた少女の耳元
へ、男が冷たく囁ささく。

「それに、もしかして、断れる立場だと思ってるの？」

「……………」

少女の顔が強張るこわばのが、遠目からでも見て取れた。

そして、征斗が行動する理由としては、それだけで十分だった。

「……………」

ポケットからスマートフォンを取り出し、リモートコントロールを起動すると、征斗はいくつかのコマンドを打ち込んだ。

次の瞬間、駐車場に止まっていた真紅のスポーツカーが、突然唸りうなりを上げ始める。

「うおっ!？」

「きやつ……!?」

突然爆音を轟とどろかせたスポーツカーに、二人の注意が集中する。

ヘッドライトが強烈なハイビームを焚たき、エンジンが龍を連想させるような叫び声を上げた。

「な、なんだ、これ……!? なんで、俺の車が……!?」
慌てるのも当然だろう。車には、誰も乗っていないのだ。

男が慌てているのを横目に、征斗は次々とコンソールにコマンドを叩たたき込んでいった。

「……ナビ經由で電子制御ユニットにアクセス、CANのデータを改竄かいざんしつつセキュリティを解除、エンジン、

ハンドル、ブレーキの制御を取得、速度調節パラメータを限界値に設定」

誰にも聞こえないよう、□の中でコマンドを転がすのは、思考整理の癖くせみたいなものだ。

刹那せつな、車は急激にエンジンの回転数を上げる。

爆音が最高潮に達したところで、征斗は最後のコマンドを容赦なく打ち込んだ。

「——イグニッション」

それは、爆発ばくはつといつてもいい加速だった。

エンジンは獅子ししのような咆哮ほうこうを上げ、急速にタイヤを回転させ始める。

凄まじい加速にタイヤが空回り、ゴムの溶ける独特の

臭においが周囲にばら撒まかれたと思うと、真紅のスポーツカ

ーは矢のように駐車場から射出された。

「ま、まままま、待てってば!？」

当然、車は急に止まれない。

そのまま正面のガードレールに突っ込むと、鉄棒の大車輪のようにぐるりと一回転して屋根から落下していった。

「ああああ……!!? 俺のスパイダーが……!!?’」

凄まじい音を立てながら、見るも無残に大破した車へ、男が大慌すきてで駆け寄る。

その隙すきに、征斗は呆然ぼうぜんとしている少女の手を引いた。

「こっち」

「え……？」

状況を呑み込めていない少女を、やや強引ごういんに引っ張って走る。

振り返らずにコンビニを離れ、角を曲がっても、そのまま走り続けた。

四つ目の角を曲がった先で、念のために監視カメラをハックして追跡されていないことを確認してから、ようやく立ち止まる。

「あ、あの……」

意外にも息を切らしていない少女が、困惑を交えた視線を向けてきた。

その時になって、征斗は少女の手を掴んだままであつ

たことに気づいて、慌てて手を放す。

「ああ、すまない。咄嗟とつさだったから」

「い、いえ、そうではなくっ」

両手と首を同時に振って否定すると、少女は大げさな仕草で何度も頭を下げてきた。

「あの、ありがとうございます！ 本当に、本当に助かりましたっ！」

「いや、別に」

改めて、少女を見る。

癖のない綺麗な髪が、頭を下げる度にふわりと舞う。

年齢はおそらく少し下だろうか、ぱっちりとした目が印象的な、美人というよりは可愛い系の女の子。

征斗はさり気なくスマートフォンをポケットに滑らせてから、その子に向き直った。

「俺は、なにもしてないし」

「そう、なのでですか？ でも、車が……」

振り返って、少女が小首を傾げる。

車の制御システムにハッキングして自爆させた、とは言えず、征斗は適当な言い訳を口にした。

「故障でもしてたんじやないか。それか、別の人が乗ってたとか」

「そう、でしょうか？ 誰も乗っていないように見えませんでしたけど……」

不思議そうに考え込んだ後、少女は不安そうに再び背

後を振り返る。

そんな少女の頭に、征斗はぽんと手を置いてやった。

「怖かったな」

「っ」

少女の手が震えている。

そんな自分の状態に改めて気づいたのだろう。我慢していた涙が、堰せきを切ったように溢あふれ出した。

「ご、ごめんなさい……私、私……っ」

「いいんだ」

怖くて泣いてしまうのは、当たり前だ。

「あんなのにしつこくされたら、誰だって怖いに決まってる」

「っ……こ、怖かったです……っ」

「それが普通だ。ほら」

ハンカチを差し出してから、男の使っていたハンカチなんて、迷惑かと思ひ直す。

しかし、少女は気にした様子もなく、すみません、と言つて受け取り、それで涙を拭き始めた。

「で、でもでも、どうして、助けてくれたんですか……？」

「どうしてって言われても」

征斗は少しだけ考えてから、単純な問いかけを返す。

「困ってたんだらう？」

「は、はい……」

「だからだよ」

そう、それは本当にシンプルなことで。

「困った人を助けるのに、理由なんていらないだろ。それが正義つてもものだと、俺は思うぞ」

「正義……」

驚いたように、少女は涙で濡れた目を見開く。

征斗は月を見上げるようにしながら、自然に出てくる言葉を紡いだ。

「正義のヒーローは、見返りを求めないし、誰かを助けるのに理由なんて求めない。何故なら、それが正義のあ
るべき姿だって、ヒーローたちは知ってるからだ」

「……」

ぽーっとした表情で、少女は征斗の話をただ黙って聞いていた。

そんな少女を見て、思わず熱く語ってしまったことに気づく。征斗は反射的にそっぽを向くと、

「……いや、なんでもない。忘れてくれ」

「あ、い、いえ、違うんですっ」

慌てた様子で、少女が一步近づいてくる。

思わず気^け圧^おされるような勢いで、少女は身を乗り出してきた。

「変だとか、思ったんじゃないんですっ。むしろ、その逆で……」

「逆？」

問い返すも、少女はもじもじとして明朗な答えを返してこない。

そして、何故か顔を真まっ赤かにして、征斗をじっと見上げてきた。

「あ、あの！ お願いがあるのですがっ！」
胸元むなもとで両手を握り締め、背伸びまでしながら、少女はこんなことを尋ねてきた。

「お名前を、教えていただけませんか？」

「名前？」

「はい。その、ダメでしょうか……？」

不安そうな眼差まなざしを受け、征斗はそれを答えないことが罪であるかのように思えて、気づいた時には口にして

いた。

「……久世。久世征斗」

「久世、征斗……さん」

何度も反芻はんすうするように口の中で征斗の名前を転がす。

なにやら変わった奴やつに捕まってしまったと思っていた

ら、少女は上目遣うわめづかいで名乗りを上げてきた。

「私、逢妻香乃あいづまかのって言います」

「はあ」

「よければ、香乃って呼んでください」

呼び方を人に押しつけられたのは、生まれて初めてか
もしれない。

香乃と名乗った少女は、緊張した面持ちで、そつと囁

くように聞いてくる。

「私は、征斗先輩、って呼んでもいいですか？」

「まあ……それは別に」

なんとなく、年下っぽいので、そう呼ばれてもおかしくはないかもしれない。

首筋にこそばゆさを感じるが、わざわざ断るのもおかしいだろう。

「それと、その、もう一つ、聞きたいことがあるのですが
けど」

香乃は逡巡^{しゅんじゆん}する様子を見せてから、勇気を振り絞るようにして、こんなことを尋ねてきた。

「先輩は今、彼女さんとか、いらっしやいますか

……？」

「……は？」

間の抜けた返事を返した征斗に、香乃はあたふたしながら続けてきた。

「いきなりすみませんっ。でも、そうですね、いらっしやいますよね。こんなに素敵な方ですもの……」

「いや、いないけど」

胸に一抹いちまつの寂さびしさが訪れるのを、強引に無視して答える。

香乃はぱつと表情を華やかなものにするど、

「ほ、本当ですかっ？ よかった……」

「……よかった？」

征斗的にはなににもよくないのだが、香乃はほっとした様子で胸を撫なで下ろしていた。

もしかして、心理テストかなにかだろうか。偏見かもしれないが、女性は占いや心理テストが好きだと聞く。もしかしたら、そういうたものの一環なのかもしれない。

その時、香乃の胸ポケットでスマートフォンが振動する。着信だったらしく、香乃は耳に当てると、「はい、逢妻です……え？ あ、はい、さっき着きましたーえ、もうこんな時間!? すみません、すぐに行きますのでっ」

急に背筋を伸ばすと、慌てた様子で通話を切ってから、

香乃はこちらに向き直ってきた。

「今日は本当にありがとうございました！ 征斗先輩に、お礼をしたというくらいなのですけど……」

「気にするな。急ぐんだらう？」

「すみません」

送ろうか、という提案を、すぐ近くだからと断った香乃は、

「それでは、また明日、です。征斗先輩」

そう言っつて、ぱたぱたと小走りに駆けていった。

途中、何度も振り返って手を振ってきた香乃が見えなくなっつてから、征斗はふと、残された言葉に首を傾げる。

「………また、明日？」

その意味がわかるはずもなく、征斗は改めて、家を目指して歩き始めた。

少し遠回りして別のコンビニに寄り、食料を調達してアパートへ戻る。

弁当とペットボトルの入ったビニール袋を指に引っかけながら、征斗は静かな夜の風を楽しんでいた。

静かな闇夜やみよを歩きながらぼんやりとする。そんな時間は、嫌いじゃない。

そんな夜の静けさの中、途中にある橋に差し掛かったところで、

「――いたか!？」

「いや、ダメだ。この辺りのはずなんだが……っ」
ばたばたとした足音とともに、黒服の男たちが駆け回
っている姿が目に入る。

焦^{あせ}った様子で走っていくが、その表情には鬼気迫るも
のがあった。

「……?　なんか、物々しいな……?」

不思議に思いながらも、危うきに近寄らずの精神で、
そのまま素通りする。

なるべく目立たぬようにしながら、橋を渡り終えよう
としたところで、

「みー」

「……………」

その小さな鳴き声に、征斗は思わず足を止めた。

「——じつじつとくるぐき。そのままだと、川に落ち
ちやうよ?」

続けざま、そんな声が聞こえてくる。

欄干から下を覗き込んでみると、そこには、一人の女
の子が、頭上に向けて叫んでいた。

その叫んだ先——橋桁はしげたにある出っぱり部分に視線を流

すと、まだ小さなトラ猫がいるのを見て取れる。

「どうやら、女の子はその子猫に向けて叫んでいるらし
い。」

「うん、いい子。言うことを聞いてくれたら、チーカマ

あげるよ？」

「みー」

「チーカマだよ。チーカマ。とつても美味しいよ」

「みー」

女の子はどこか淡々とした口調で言いながら、チーカマを振り振りしてみるも、子猫は警戒して近寄ってこない。
い。

なんとなく気になった征斗は、脇わきの階段から河川敷に下りた。

女の子は柵の上に乗り、器用にバランスを取りながら、子猫に手を伸ばしている。

「うん、そう。こつち。こつちが安全。ううん、違ふよ。」

そっちは危ないよー」

悪い予感というのは、どうして当たるのだろうか。

女の子のバランス感覚は優れていたが、子猫に意識を向け過ぎたのか、バランスを崩して川の方へと落下しそうになる。

「わ」

「ーおい」

咄嗟に駆け寄った征斗が、その腕を慌てて搦んだ。

からだ身体からだの小さな女の子だったので、腕力に自信のない征斗でも、なんとか引っ張り上げること成功する。

「……危なかった」

「危なかった、じゃないだろ。気をつけろよ。落ちたら

泥まみれになるぞ」

お世辞にも、綺麗とは言い難いがた川だ。

シャワーを浴びたくらいでは、ヘドロの香ばしい臭いは落ちやしない。

「助けられた。ありがとう」

表情の変化があまりなく、淡々とした口調でお礼を告げてきたのは、同じ学校の制服を着た女子生徒だった。

肩口辺りまで髪を伸ばしており、背は女子にしてもなお低い方だ。

合うサイズがなかったのか、ややぶかぶかの制服に身を包んでいる。おませな女の子が、姉の制服をこっそり拝借して着ているかのようだ。

「子猫か？」

「うん。そう」

小さく頷いてから、女子生徒は橋桁を見上げる。

メンテナンス用に設けられたいくつかの踏み台を伝って、子猫が高いところまで登ってしまったらしい。

「あそこから、降りられなくなったらしい。助けてあげたいのだけれど」

「エサで釣るのは？」

「ううん、ダメだった。警戒されているみたいで、むしろ危ない方に——あ」

人の声に警戒したのか、怯えた様子おびで子猫はさらに上へと駆けてしまう。

「あつちに落ちたら、溺れちやう。この川、結構深いから」

確かに、ここは川幅のわりに水深がそこそこある。流れも速いので、子猫が飛び込んだら、かなり危険だ。

「少し待ってる」

征斗はビニール袋を置いてから、スマートフォンを取り出す。

ロックを解除してから、必要となるアプリを立ち上げた。コマンドラインに命令を手早く打ち込んでいると、女子生徒がごくわずかながらに眉を顰めた。

「今は非常事態。スマホで遊んでいる場合じゃー」

「暗いからな。ライトが必要だろ？」

もちろん、そんなものは方便だ。

飛んでいる無線通信の状態を解析し、埋め込まれたデータを手早く復号する。

その中で最適なものを掴み取ると、征斗は橋の下部分を指差した。

「この橋には、メンテナンスや掃除のための遠隔操作ロボットがついている。橋の下の部分を行ったり来たりしてる丸いの、見たことないか？」

「うん、見たことはある」

女子生徒はわずかに眉を動かして不審そうな表情を作ると、淡々と続けてきた。

「でも、たまにしか動いていない。そんなに都合よく動

くはずが——」

「ほら、来た」

征斗が指差した先、橋の反対側から、丸っこい掃除ロボットを一回り大きくしたような物体が、橋の下のレーンルを自走していた。

「——MQTTの内容を改竄して制御しつつ、相互認証機能を一時的にキル、自動動作モードから手動制御モードへの変更を完了」

女子生徒が遠隔操作ロボットに注目している間に、必要な処理を全て実施しておく。

そのまま遠隔操作ロボットが橋のこちら側へ来た時、それに驚いた子猫が、ぴよんと戻ってきた。

「あ、猫が戻ってきた」

その後も、ロボットに追い立てられるように、子猫は河川敷の方へと戻ってくる。

「……？ あのロボット、猫を誘導するように動いている……？」

「たまたまだろ。運がよかったな」

さりげなくスマートフォンをポケットに戻しながら、征斗はしれっと答える。

しかし、相手が動物である限り、予想外の事態というものが発生するもので。

「あ、猫が」

子猫は追いかけられたことで慌てたのか、踏み台を戻

るのではなく、川へ飛び込みようと四肢を折り曲げた。

「そっちはダメっ」

人間の制止など聞くはずもなく、ぴよんと跳躍してしまおう。

思い切ったダイブをした先には、大きな流れを持つ河川が雄大に待ち構えていた。

そして――

「――よっつと」

子猫の動きを予測していた征斗は、川に飛び込みつつ、子猫を両手でキャッチした。

膝上^{ひざ}まで水に浸かった状態で、^{あば}暴れる子猫をなんとか抱え込む。

「ナイスキャッチ。でも、大丈夫？」

「ああ。子供でも猫だな。しっかり着地したぞ」

「そうじゃない」

女子生徒は川岸に立つと、征斗の身体を不思議そうな眼差しで眺めてきた。

「急に川に飛び込んだりして、あなたは大丈夫？」

「ああ、別に。足だけだし」

本当は腰まで濡れてしまい、かなり気持ち悪いのだが、見栄を張っておいた。

そのまま河川敷に上がると、待っていた女子生徒に子猫を手渡す。

「ほれ」

「うん。ありがとう」

柔らかい子猫を受け取った女子生徒は、安堵あんどしたように表情を緩ゆるめた。

「よかった。怪我けがはしてない？」

「みー」

少女が顎あごの下を撫でてやると、子猫は気持ちよさそうに身をよじらせた。

子猫に怪我がないことがわかると、少女は一転して征斗に向き直ってくる。

「猫は大丈夫だった。あなたは本当に大丈夫？ 怪我してない？」

「ああ」

実際、濡れただけで怪我などはしていない。

「さすがに靴の中が気持ち悪いな。ま、放っておけば乾くだろう」

「そんなことをしていたら、風邪をひく。こっち来て」
征斗の腕を引くと、女子生徒は自分の鞆が置いてあるところまで連れて行く。

そして、鞆の中からハンカチを取り出すと、自分が濡れるのも気にせず、女子生徒は征斗のスラックスを拭き始めた。

「そんな丁寧に拭かなくてもいいぞ？」

「ううん。そんなのダメ」

ふるふると首を振りながら、女子生徒は抑揚のない声

で続けた。

「あなたのおかげで、この子は助かった。しかも、わたしが助けようとしてたのに、上手うまくいかなかったのを、助けてくれた。だから、濡れたのは、わたしのせいみたいなもの」

「そんな大げさな」

「ううん。大げさじゃない。これが普通」

意外に世話焼き気質なのか、丁寧、かつ、優しい手つきで拭いてくる。

それがなんだかくすぐったくて、征斗は子猫の顎の下を指で撫でた。

「俺のことはいいから。その子、どうするんだ？」

「うん。どうしよう」

困ったようにつぶやいて、拭いていた手を止める。
女子生徒が反対の手で抱えていた子猫は、呑気のんきに後ろ
足で頭を搔かいていた。

「この子は、捨て猫らしい」

「そうなのか？」

野良のらかと思っていた。

女子生徒は橋の下に視線を向けると、

「あつちに毛布を敷いたダンボールがあつた。多分、誰
かが捨てたんだと思う。たまたまそれを見つけた時、こ
の子の鳴き声が聞こえてきて」
みー、と、肯定するように子猫が鳴き声を上げる。

「大丈夫。この子のことは、わたしがなんとかする。ここで見捨てたら、この子を捨てた人と同じになっちゃうから」

「そうか」

淡々と言い切る女子生徒を見て、征斗は靴の中に溜^たまった水を捨てながら告げた。

「俺にできることがあったら言ってくれ。できる範囲で手伝うから」

「手伝う？ どうして？」

「だって、困ってるんだろ？」

子猫を抱いている女子生徒に、征斗は当然の回答を返す。

「困っている人を助けるのは、当たり前前のことだ。それを見て見ぬフリをするのは、正義じゃない」
女子生徒は不思議そうな表情で見返してくると、ちょこんと小首を傾げた。

「……あなたは、わたしのこと、変な子だと思わないの？」

「そんなこと、思うわけないだろ」
濡れた靴を履^はき直し、その嫌な感触に眉を顰めながら続ける。

「お前がいなかったら、こいつは助からなかったかもしれない。そういう意味では、お前は一つの命を救ったかもしれないんだ」

「……………」

驚いた様子で、女子生徒は征斗を見上げてくる。

しかし、それは特別なことではなく、ごくごく、当たり前前の感覚だった。

「それは、大げさでもなんでもなく、凄^{すご}いことだ。とある正義のヒーローも、一つ一つは小さなことかもしれないけど、それが積み重なれば、とてつもない大きな力になるって言うてたぞ。だから、尊敬こそすれ、バカにしたりするはずないさ」

「……………変な人」

「それはお互い様だ」

動物好きなのかは知らないが、必死に子猫を助けよう

としていたその心意気は、心地よいものだと思う。

「聞いてもいい？」

女子生徒はそんな征斗の感想が意外だったのか、こちらを観察するように見回してきた。

「わたしは、瑠璃^{るり}。あなたのお名前は？」

「久世だよ。久世征斗」

「久世……征斗」

あまり表情が動かない性格のようで、抑揚なくつぶやくも、その目は好奇心で溢^{あふ}れていた。

「もう一つ、聞きたいことがある。とても、大事なことなのだけけれど」

今日はよく質問される日だと思っていたところで、瑠

璃がこんな問いかけを追加してきた。

「征斗は今、お付き合いしている恋人、いる？」

「……………」

既視感、とでも言うのだろうか。

つい先ほど、同じことを聞かれたような気がする。

「いる？ いない？」

「……いや、いないけど」

素直に事実だけを答えると、瑠璃は安心したように息をついた。

「そう。よかった」

「……よかった？」

瑠璃の言葉の意図を把握する前に、瑠璃は立てかけて

いた細長い革の袋を肩に引っかけると、反対の手で子猫を抱え直した。

「今日は、もう行かなければいけない。この子のことは、任せてほしい」

「大丈夫か？」

「うん。少なくとも、今日一日くらいは」

瑠璃の腕の中で、子猫が呑気に欠伸あくびをする。その顎を軽く撫でると、

「じゃあね、征斗。また明日」

瑠璃はそのまま身軽に土手へ戻って、闇夜に消えていった。

残された征斗は、今日二回目に告げられた言葉に首を

捻^{ひね}ると、

「明日つて、なんかあつたか……？」

思い当たる節はなにもない。

同じ学校だから会うこともある、という意味だと思い直し、征斗はビニール袋を拾い直して自宅のアパートに足先を向けた。

二度あることは三度ある、と昔の人は言っただらしい。

冷めたコンビニ弁当と疲れを引きずって、閑静な住宅街にあるアパートへと辿^{たど}り着いた征斗を待っていたのは、

「——ちよっと、待ちなさいよ、大家代理」

仁王立におうだちで待ち構えていた、一人の少女だった。

腰までの長い髪を揺らした、同年代の女の子。意志の強そうな視線をこちらに向けながら、街灯の下で両手を腰に当てていた。

全く知らない人物ではなく、このアパートで何度か顔を合わせたことがある。

「ああ、確か一〇一号室の……」

「みお濡よ。奥和田おくわだ濡。これ貼はったの、あなたでしょ？」

濡と名乗ってきた少女は、手にしていたA4サイズの紙を突きつけてきた。

そこには、味気ないフォントと共に、工事のお知らせが書かれている。

「どういうこと？ 私、こんな聞いてないんだけど」

「どうもこうも、そのままの意味だ。ガス管の工事するから、一階はしばらく温水が出ないってだけだよ」

「だけって、大問題じゃないっ！」

地団じだんだ太を踏みそうなくらいの勢いで、濡はこんなことを言ってくる。

「シャワーを浴びようと思って入ったら、水しか出なかった私の気持ちができる？ 五分くらい水しか浴びてなかったから、危うくペンギンの気持ちがわかつちやうところだったわ！」

「それは凄いな」

言ってる意味はよくわからないが、言いたいことはわ

からないでもない。

「これ、あんたが貼ったんでしょ？ どういうつもりよ、なんの嫌がらせなの？」

「失礼な。嫌がらせじゃなく、単なる工事のお知らせだ」

「嘘うそつかないでっ。いつもいつも、エアコンが使えなくなるとか、雨漏りあまもがするとか、凄い振動音がするとか、そんな張り紙ばかりしてきて。私になにか恨みでもあるの？」

「……いや、全部、このアパートがボロいからだから」
当然、嫌がらせでやっているわけではない。

築年数だけで言えば、周囲の物件の中で頭一つ抜きに

出ているこのボロアパートは、修理の手が入っていない場所はない、というくらいの老兵だ。

「やっぱり、お婆様ばあさまの判断は間違っていたんだわ。こんな人を大家代理にするなんて」

「別に、いつでも代わるぞ。大家の婆さんに押しつけて、困ってるくらいだ」

「言っただわね？」

売り言葉に買い言葉、ではないが、滯はふん、と鼻を鳴らすと、

「いいわよ、私がやるわよ、大家代理。お婆様に言っ、今度から全部私がやってやるんだから」

滯が言っているお婆様とは、このコーポクワダの大

家であり、元一〇一号室の住人だ。

今はここを離れており、どういう経緯があつたかは知らないが、その孫娘である漣が代わりとして半年くらい前に引越してきた。

「とにかく、ガスが通ればいいんでしょ？　なら、ガスの栓を開けちゃえばいいじゃない。これかしら？」

「あ、おい、勝手に——」

征斗の制止を聞かず、漣は剥き出しむになっているアパートの配管に手をかける。

次の瞬間、狙ねらったかのように、配管から漣の頭上に水が噴き出してきた。

「きゃっ!?　ちょ、なによこれ!？」

局所的なゲリラ豪雨を眺めながら、征斗は冷静に言う。
「それは水栓だし、その配管は前に破裂した時から放置してるヤツだから」

「さ、先に言いなさいよ!? 水が、校長先生の話みたい
に止まらないじゃない!?!」

慌てて止めようとするも、水は滝となつて降り注いでくる。

濡の代わりに、征斗が水を止めようとするも、

「あー、これはダメだな……」

古くなつた止水栓を無理やりこじ開けたからだろう。
元の方向に戻らなくなっている。

征斗はポケットにスマートフォンを入れたまま、指先

だけで手早く操作し始める。

「――水道局の管理サーバーに接続、暗号通信のセッション鍵かぎを疑似生成、通信にインタラプトしつつコマンドを送信し、一時的にコーポオクワダへの供給を停止」もちろん、セキュリティに引っかからないための偽装工作も忘れない。

直後、間欠泉のように噴き出していた水が、嘘のようにピタリと止まった。

「あ、あれ、止まった……？」

「大丈夫か？」

一応そう聞いてみるも、どう考えても大丈夫には見えなかった。

全身、濡れていない箇所はないというくらいに濡れており、長い髪がぺたりと身体に貼りついていてる。

下着が透けて見えるほどだったけど、当人はそれどころではなく、

「もうやだあ……部屋のシャワーも壊れてるのに……」

半泣きになりながら、濡は濡れ鼠ねずみになっている自分を
見下ろす。

さすがに可哀想かわいそうになつてきた征斗は、鞆からハンカチ
を取り出すと、

「ほら、じっとしてろ」

「え……？」

そつと、長い髪を拭いてやった。

もちろん、ハンカチくらいでどうにかなる状況ではないのだが、なにもしないよりはマシだろう。

「すまん、今ハンカチしか持ってなくて」

「う、ううん……」

小さく首を振って、ぽーっとした目をこちらに向けていたが、滯はすぐにはつとした表情を作ると、

「――じゃなくてー！ ちよつと、私はこんなことじゃ騙だまされないんだからねっ」

「なにを騙すんだよ」

「とぼけないで。あんだ、亜里沙のこと、騙してるでしよ」

「亜里沙……？」

いきなり知人の名前が出てきて、征斗は動きを止める。「というか、なんで亜里沙のこと知ってるんだ？　もしかして、同じ学校なのか？」

「な……あなた、そんなことも知らなかったわけ？」

漣は驚いたように目を見開いてから、再びきつと征斗を睨^{にら}みつけてきた。

「いい機会だから、はっきり言っておくわ。これ以上、亜里沙にちょっかい出さないで」

「ちょっかい……？」

「そうよ」

とぼけないで、と言ってから、漣はこう続けてくる。

「知ってるんだから。あんだ、亜里沙と同じところでバイトしてるんでしょ？　いくら亜里沙に気があるからって、それじゃストーカーじゃない」

「……待て、いろいろ勘違いしてないか？」

「してないわよ。亜里沙はふわふわしてる子だから気にしてないみたいだけど、私の目は誤魔化せ^{ごまか}ないからね」
「どうやら、根本的な部分で相互理解が及^{およ}んでいないらしい。」

「亜里沙は私の大事な親友なの。その亜里沙にちよつかい出すんだから、覚悟はできてるのよね——しゅん！」
「可愛らしいくしゃみをした濡に、征斗は努めて淡々と事実だけを告げた。」

「あそこでバイトを始めたのは、俺の方が先だ。亜里沙は後から入ってきたんだよ」

「……え？ そうなの？」

目をぱちくりさせた滯に、征斗は深々と頷くと、

「それに、亜里沙とは同じクラスだけど、学校でそこまです話をするわけじゃない。同じ学校だっていうなら、それくらい知ってるだろ？」

「それは、まあ、そうだけど……くしゅん！」

小さく身震いをした滯は、途方に暮れた表情で自分を抱き締めた。

「どうしよう……部屋のシャワー、お湯出ないし……しゅん！」

確かに、だいぶ温かくなってきたとはいえ、まだ夜は肌寒い季節だ。

ずぶ濡れで夜風に当たっていたら、あっという間に風邪をひいてしまおうだろう。

「よかったらウチのシャワー使うか？ 工事は一階だけだから、ウチの部屋ならお湯出るぞ」

「え……？」

いきなりの提案に、滯は驚いたようにそうぼう双眸を見開く。

動きを止めた滯を見て、征斗は自分の提案にデリカシ—というものが欠けていたことに気づくと、

「ああ、いや、すまん。嫌だよな、男の部屋でなんて—」

「………。緊急事態だから、仕方ないわよね」
漣は自分を納得させるように、そんなことをつぶやいて頷くと、征斗を見上げてきた。

「その……シャワー貸して。あ、い、言っとくけど、覗いたら殺すからね？」

断る理由もなく、征斗は水道管に手早く応急処置をして、二階にある自室へと漣を上げた。

さほど広くない1LDKの古めかしいアパート。古い畳の部屋を中心として、さして物を置いていない、小さな部屋だ。

バブルもオイルショックも経験している大ベテランだが、いかんせん、水回りを中心とした設備に問題を抱え

まくっっており、今は征斗以外の住民が誰もいない。

「先に使っちゃってもいいの……？」

「ああ。ほら、これタオルと着替えのジャージ。ちゃんと洗ったヤツだから」

押し入れから取り出したタオルとジャージを押しつけると、征斗は少し考え、

「外、出てようか？」

「い、いいわよ。そこまでしなくても」

急にしおらしくなった滯が、タオルとジャージを胸に抱えると、

「じゃあ、借りるわね」

「ああ。ある物はなんでも使ってくれていいから」

「う、うん。その……あ、ありがとう」

脱衣所のドアが、静かに閉じられる。

そのまま、するすると服を脱ぐ音が聞こえ、すぐさまシャワーに変わった。

もちろん、覗く気なんてないし、不埒ふらちな行為をするつもりもない。

それでも、薄いドアを隔てた先に、全裸の少女がいるのを想像してしまうと、鼓動が速くなるのを抑えられなかった。

そんな自分の煩悩ぼんのうを抑えるため、征斗は濡れた制服を手早く着替えると、お湯を沸かし始める。

どれくらい雑念を捨てていただけるか。やがて、古び

たヤカンの湯が沸いたところで、

「……ねえ、聞いてもいい？」

ドアの向こう側から、そつと声が聞こえてきた。

「お婆様が倒れた時、救急車を呼んでくれたの、あなた
つて本当？」

「ん……」

少しだけ躊躇^{ちゆうちゆう}してから、征斗は当時のことを口に出す。

「まあ、たまたま一緒にいたからな」

「そうだったんだ……その」

わずかな沈黙を挟んでから、漣はそつと、こう告げて
きた。

「……ありがと。病院の先生からも、初動で迅速な対応

があつたから大事に至らなかつた、つて言われたわ」
「そうか」

あれは、半年くらい前のことだつただろうか。

大家の婆さんと一緒に草むしりをしていたところ、急に婆さんが倒れ込んでしまったのだ。

急いで救急車を呼び、持病の有無を救急隊員に伝え、病院に家族の連絡先などを教えたのは征斗だ。

「婆さん、元気にしてるのか？」

「ええ。今は伯母の家で養生しているわ。ここに戻りたがつて仕方がなかつたんだけど、さすがに大家の仕事を続けさせるわけにはいかないから」

「そうだろうな」

ペーパードリップのコーヒーを用意しながら、征斗は苦笑する。

「どうせ、ここには俺とお前しか住んでないんだ。無理に戻ってくる必要なんてない」

「わかってないわね。だから、よ」

漣は征斗の言葉を否定してくると、

「あんたがいるから、お婆様は戻りたがっていたの。説得するの、大変だったんだからね？」

確かに、あの偏屈なご老輩が人の言うことを素直に聞くとは思えない。

「じゃあ、なんでお前は――」

「漣よ。お前なんて名前じゃないわ」

「――漣は、どっしりして、いっくに引っ越してきたんだ？
シャワーもロクに出ないこんなボロアパートに」
大家代理の任務は、家賃を少しまけてもらおう条件で、
征斗が引き受けている。

だから、孫娘がわざわざ引っ越してきた時は、疑問に
思ったものだ。

「……あなたが住んでたからよ」

「は？」

ぽつりとこぼした漣が、髪を拭きながら脱衣所から出
てくる。

「お婆様も、亜里沙も、あんたのこと、妙に褒めるの。
征斗はいい子だ、とか、久世くんは優しいんだ、とか。

もう、耳タコになるくらい聞かされたわ」

澪の上気した肌を前に、目のやり場に困っていたが、澪はそんなことに気づいた様子もなく続けてきた。

「でも、私はお婆様も、亜里沙も、騙されてるんだと思
った。私が大好きな二人を騙すヤツは許せない。絶対に、
化けの皮を剥^はがしてやるんだーって」

「……まさか、それだけのために引越してきたのか？」

「う……まあ、それだけじゃないんだけど」

とごによごによごに言いつつ、征斗が差し出したマグカップを受け取った。

「でも、違った。あんたはいつも、アパートの手入れは
ちゃんとしてたし、お婆様のことも助けてくれたし、そ

れに」

そつと、どこか嬉しうれそうに滯ほほえが微笑む。

「亜里沙のことだつて、私の勘違いだつたみたいだし」

「……………」

そうでもないのだが、余計なことをここで言うべきじゃないことくらい、征斗にもわかる。

小さなちゃぶ台を囲んで二人が座つてから、滯は不思議そうな顔で尋ねてきた。

「でも、どうして、ここまでしてくれるの？ あんたが私を助ける理由なんて、なにもないのに」

「そんなの、決まってるだろ」

自分の分のコーヒーを口にしながら、征斗は最初から

一つだけしかない答えを□にする。

「相手が誰だろうと、困ってる人がいて、その人にできることがあるなら、ただそれをするだけだよ。もちろん、余計なことだったり、お節介だったりすることもあるだろうけどさ」

「……………」

驚いたように目をぱちくりさせている滯へ、征斗は淡々と続けた。

「百人のうち、一人でも助かる人がいるなら、それでいい。自己満足かもしれないけど、それでも、救いを求める人がいるなら、ただそれ続けるだけだ——って、洗濯戦隊アラウンジャーのホワイトが□癖のように言っ

ていたぞ」

「……は？ アラウンジャー？」

「知らないのか」

あの名作を知らないなんて、人生の大半を損している
と言っても過言ではない。

「悪の秘密結社『ドロココロン』と戦う、綺麗好きな戦
隊ヒーローだ。トレードマークをあしらった洗濯機まで
売り出されたほどだったんだが、主要な視聴者である小
学生が買えるわけもなく、在庫の山になったという悲し
い後日談が話題になっっていたんだ」

「……：：：：そういえば、洗面所に変な形の洗濯機が置いてあ
ったわね」

家電量販店で投げ売りされていたのを、ついつい衝動
買いしてしまった。

もちろん、いい買い物をしたと思っっているから、後悔
はしていない。

「……変なヤツ」

「お互い様だ」

「ふんだ。ナマイキ」

言いながらも、滯の表情には、最初のような刺々しさ^{とげとげ}
はなく、どこか嬉しさを噛み殺すように口元を緩ませて
いた。

「ねえ……その、聞いてもいい？」

「いいぞ。アラウンジャーの必殺技はバブルクラッシュヤ

「持っている石^{せつけん}鱈の数で攻撃力が決定するという斬新な技で」

「そんなこと誰も聞いてないわよ!？」

漣がばんばんと畳を叩きながら否定してくる。

「全くもう……そ、そうじゃなくて」

もじもじとジヤージの裾^{すそ}を弄ると、漣は恥^はずかしそうに、こんなことを聞いてきた。

「あんだ今、付き合ってるカノジョとか、その、いるの……?」

「……ん？」

この流れを、どこかで体験した記憶がある。既視感というには、あまりに鮮明な記憶だ。しかし、

本能がその事実を思い出すことに対し、強烈な拒絶を示しているような、そんな感覚。

黙った征斗を見て、漣は落胆したような表情を作ると、
「……ど、ど、うなの？ やっぱ、り、いる、のよね
……？」

「いや……いないけど」

「ほ、本当っ？」

漣は跳ねるように、身を乗り出してくる。

その時、テーブルに出していた漣のスマートフォンが
微振動して、主に着信を知らせてくる。

「もう、なによ……って、いけない、もうこんな時間
!？」

慌てて立ち上がった濡が、自分の格好をはっと見下ろすと、

「あ、ジャージ返さないでっ」

「いや、いつでもいいよ。暇な時に、部屋の前に置いていってくれ」

「そんなわけにはいかないわよ」

きつぱりと言ってから、濡は自分の脱いだ服を脱衣所から回収すると、

「後で返すし、必ずお礼もするから！ それじゃ、また明日！」

湿った髪を舞わせながら、濡はぱたぱたと外に出ていった。

ぬるくなつてしまったマグカップのコーヒーを一〇すすつてから、征斗はつぶやく。

「……明日……」

ただの平日のはずだが、征斗が知らないだけで、なにかあるのだろうか。

少しだけ開けた窓から、自分の部屋に駆け戻る滯を見下ろし、征斗はしきりに首を捻るしかなかつた。

そして、事件が起こったのは、その翌朝のことだった。いつもより早く起きてしまった征斗は、手早く着替え、寢癖を適当に直してから、鞆を引っかけて外に出た。

太陽が元気に空を泳ぎ、雲一つない青空の下を、征斗はのんびりと歩く。

そのまま橋を渡ると、それなりの勾配こうばいを持つ、長い坂が見えてきた。

征斗の通う学校は、坂の上に鎮座している。

そこしか土地が空いてなかったのか、はたまた、学生の運動不足解消を狙ったのかはわからないが、征斗は坂道をのんびり登る感覚が嫌いではなかった。

まだかなり早い時間なので、他の生徒ほかの姿はほとんどない。

それでも、皆無というわけではなかったようで、

「——あ、征斗先輩っ」

跳ねるような声を受け、征斗は顔を上げた。

坂の途中、立ち木に背を向けて立っていた少女が、こちらに気づいてぱたぱたと駆け寄ってきている。

その綺麗で真まっ直すぐな髪と、ぱっちりとした瞳ひとみには見覚えがあった。

「……香乃？」

「はい。おはようございます、征斗先輩」

ふんわりとした笑みを浮かべて、香乃が一礼してくる。昨日の今日で会うとは思っていなかったが、それよりも気になったのは香乃の纏まとっている、見知った制服だった。

「その制服……ウチの生徒だったのか」

「正確には、今日からお世話になるんです。実は、こちらに転入することになりました」

見せびらかすように、制服姿でくるりと一回転してくる。確かに、その制服は真新しくぴりっとした印象を与えてきた。

「そのリボン、一年生か？」

「はい。ですから、征斗先輩、なんですよ？」

悪戯いたづらっぽく笑った香乃は、こちらの制服を見て、征斗のことを同じ学校の先輩だと知っていた、ということらしい。

「それで、誰か待ってたのか？」

「はい。その、実は、征斗先輩をお待ちしてたんです」

にっこりと微笑んだ香乃が、意外なことを言ってくる。征斗が同じ学校であることは、制服でわかったのだから。しかし、わざわざ早朝に待ち構えている理由がわからない。

「なにか用か？　もしかして、あの男がまた――」
「あ、いえ、違うんです」

小さく首を振って、香乃はそっと両手を胸の前で握り締めた。

「征斗先輩に、どうしても、お話ししたいことがあったんです。それで、その、居ても立ってもいられなくなつて……」

少しだけ潤んだ瞳で見上げてきながら、香乃が一步、

歩み寄ってきてくる。

上気した頬ほおに、なにかを期待するような双眸。何故だか征斗の鼓動も速くなり、朝の穏やかな風さえ、どこか遠くに感じられるようになる。

香乃はわずかに間を置くと、意を決したように口を開いた。

「征斗先輩。私、今すぐに、征斗先輩にお伝えしたいことがあつて——」

「——見つけた。征斗」

そこに、別の声がインターセプトしてくる。

とん、と軽かろやかに坂の上の方から下りてきたのは、瑠璃だった。

ぶかぶかの制服を適当に着崩し、意外なほど身軽な動きを見せながら、小柄な女の子が征斗の前に着地する。「坂の上からなら、見つけられると思っていた。けど、思ったより早くて驚いた」

「俺を探してたのか？　もしかして、子猫になにかあったとか？」

「ううん、違う。征斗に、言わなきやいけないことがあるから、待ってただけ」

小さく首を振って、どこかぼんやりとした眼差しを征斗に向けながら、瑠璃は続けてきた。

「こういう気持ち、初めてだから、どう言ったらいいかわからなかった。でも、考えても考えても、一つの答え

しか出てこなかったから、それをただ、征斗に伝えれば
いいとわかった」

淡々と、それでいて、力の籠もった言葉を、瑠璃は征
斗にぶつけてくる。

瑠璃は小さな身体に大きな意志を宿し、その心の底に
あるものを言語化してきた。

「今日、征斗に一番に伝えたかった。征斗、わたしは、
征斗のこと——」

「——見つけたっ！」

三度、割り込む声。

振り向くと、坂の下から息を切らしながら、一人の女
の子が駆けてきていた。

「よかった、間に合った……！　もう、部屋に行ったら、いないんじゃない……っ」

「ああ、今日はちよつと早く目が覚めたから」

静寂は金よりも重く尊いと思っっているので、朝の静かな教室というのは、昔から好きだった。

そんな征斗の前に立ったのは、下の階の住人である漣だった。

息を整えながら、髪の具合を手早く直している漣に、征斗は問いかける。

「なにか用だったか？　ガスのこと、なにか問題があったとか？」

「そ、そうじゃないんだけど」

ゆっくりと頭を振ると、漣は少しだけ呼吸が落ち着くのを待ってから、静かに話し始めた。

「……本当は放課後まで待ってから、言おうと思ったの。でもね、もう、膨らみ過ぎた風船みたいに、自分の気持ちを抑えることができなくなりそう……それで、その……」

「気持ち……？」

そういえば、香乃も似たようなことを言っていた。

漣は頬を桃色に染め、落ち着きなく指先を組み替えながら、上目遣いを寄越してくる。

そして、漣は覚悟を決めたように両手を握り締めると、征斗にぐっと顔を近づけてきた。

「あの、さ。驚かないで聞いてほしいんだけど。私、あんたのこと——」

「——ま、待ってくださいつ」

それまで黙って聞いていた香乃が、慌てた様子で割って入ってくると、

「私が最初にお会いしたので、私のお話を先にしてほしいですっ」

「そんなの知らない。こちらは特に大事な要件。優先度はわたしの方が高い」

「そ、それは私も同じよ！ この件に関してだけは、少しだって待てないわ！」

三人はそれぞれ、一步も譲らない姿勢を示す。

何故だろうか。なんだかとても嫌な予感がしてくる。

「であれば、早いもの勝ちですっ！」

通学路の真ん中、香乃が他の二人をすっとかわして前に出ると、わずかに潤んだ瞳で征斗を見上げてきた。

「あの、征斗先輩。突然、こんなことを言われて、驚いてしまうと思うのですけれど」

そして、心の奥底にある純粋な感情を、ただただシンプルな言葉に変換して、伝えてくる。

「――私、征斗先輩のこと、好きになっちゃったんですっ！」

その声は、真っ直ぐに征斗の心を貫いてきて。

「もう、この気持ちを胸に抑えておくことができなく

らい、本当に、好きで好きで、大好きなんです。ですから、征斗先輩。その、私とお付き合い、してくれませんか……？」

香乃の声と純粹な瞳を受け、征斗はただ、動けずに一人の少女の告白を受ける。

もちろん、誰かから告白されたのなんて、生まれて初めてだ。

どうしていいかもわからず、思考も身体もフリーズしていたところで、

「——待ってほしい」

瑠璃がすつと音もなく間に入ると、透き通るような眼差しで征斗を見上げてくる。

「征斗のことを好きなのは、わたしも同じ。征斗、わたしと付き合おうといい。たくさん、気持ちいいことしてあげるよ？」

とんでもないことを淡々と言いながら、瑠璃がそっと身を寄せてきた。

しかし、それを止めたのは、もう一人の女の子で。

「――ま、待ちなさいよっ」

割って入るように、今度は漣が征斗の前に立つ。

長い髪を落ち着きなく弄りながら、漣はそっと上目遣いを寄越してくると、

「あんたのこと、ずっと嫌いだった。私とあんたは、力マキリとアザラシが恋に落ちるくらい、あり得ない組

み合わせだっと思ってた。でも、そうじゃないってわかった途端、自分でも驚くくらい、気持ち溢れて止まらないの。これを止められるのは、あんたしかいないんだ。だから、その、私が付き合っても、いいんだからね……？」

震える子犬のような目で見上げられ、反射的に頷きそうになっってしまう。

徐々に人が増えてきた通学路で、可愛い女の子三人に囲まれている自分がある。

しかも、三人同時に告白されるなんて、一体、なんの冗談だろうか。

再び、互いに牽制けんせいし始めた香乃たちを横目に、征斗は

ただ、訪れた頭痛と共に青く高い空を仰あぐおしかなかった。



「ちよろいんですか
恋人にはなれませんか？」
2018年9月15日頃発売予定！！
どうぞよろしくお願ひします！！